

# 弓道と私

鳥取市立北中学校 二年 倉益 佳乃子

私が弓道に出会ったのは、中学一年生の春のことでした。

中学校に入って、特にやりたいスポーツや入りたい部活もなかった私は、どの部活に入部しようか迷っていました。ある日の放課後、私はなんとなくで弓道部の見学に行きました。そこで私は一瞬で目を奪われました。先輩方は一心に的を見つめ、一本一本の的に全身全霊を傾けていました。私はその姿を見て、ただただカッコいいと思いました。気づくと、三十分以上ずっと見学をしていました。私は、入るならこの部しかないと思い、数日後弓道部に入部しました。

弓道部に入部してから、私は弓道の魅力にますますはまっていきました。最初はひもで射形の練習をしていたのが、だんだんとチューブ、ゴム弓とレベルアップしていき、射場で本格的に射てるようになったときは本当に嬉しかったです。矢が的に中るとバンツというとても気持ちのいい音が響き渡り、大きな達成感を得るとともに、次も中ててやるぞというやる気がわいてきます。また、的に中てることができなくても、何故中らなかったのか考えることで、新たに得られるものがあります。さらに、私は同じ部活の仲間にも恵まれることができました。先輩方はとても優しくアドバイスもたくさんしてくださいました。同じ学年の友達も、互いに高め合える特別な存在となりました。

このような、素敵な環境の中、私は日々弓道にはげんでいきました。

二年生の夏、私は東部総体に女子団体メンバーとして参加しました。団体のメンバーは五人なのですが、三年生の女子が四人しかいなかったのので二年生の中から私が選ばれることになったのです。この東部総体で入賞できないと、三年生の先輩方は部活を引退することになります。さら

に、去年の女子団体メンバーは全国五位という素晴らしい成績を残していました。なので、しっかり結果を残さないといけないというプレッシャーがあり、とても緊張しました。

東部総体は無事入賞することができ、県総体に出場することができました。県総体では一位をとらないと全国大会に行けないし、三年生の先輩方も引退してしまうので、よりいっそう緊張とプレッシャーを感じました。競技が始まる直前、先輩方は「リラックスしてやろう」と声をかけてくださいました。私は、自分の中のいちばん良い射ができるよう深呼吸をし、集中して臨みました。

結果として、私は一本も的中することができず、チームは予選落ちしました。

射場から出た瞬間、私の目からは自然と涙があふれてきました。私は、自分のせいでチームが決勝に行けなかったのだと思いました。みんなの期待を裏切ってしまったと思いました。私はしばらく涙が止まりませんでした。気がつくとき、先輩方も泣いていました。

数日後のお別れ会で、先輩方は口をそろえて「来年こそは全国に行ってほしい」と言いました。同級生の人達は、「絶対に私達で全国に行こうな」と言ってくれました。

私はその時、いつまでもよくよしてはだめなんだと思いました。悲しむことよりも、来年の県総体が終わった後に嬉し涙を流せるように、今から前向きに努力を積み重ねていくことの方が大事なんだと気づきました。確かに県総体の結果は悔しかったけど、その悔しさをバネにして練習をし続ける事が大切なんだと気づきました。

今では、県総体での出来事は悲しい思い出ではなく、自分にやる気を出させるためのエネルギーとなっています。

私は、弓道部に入ったことで素晴らしい仲間達と共に素晴らしい気持ちを知ることができました。私は、弓道に出会えたことを心の底から誇りに思っています。